

4 恋果て止めて

こい は て と め て

まにふいくみやほか **Fukapon**

既刊はウェブサイトにて無料頒布中

<http://www.projectkaigo.org/mnfikmyhk/>

「はい、ホームルームやるよー」
いつも通りにやってきた萩鏡子^{わききょうこ}によって、暗澹たる教室に光がもたらされた。

しかし彼女にも異常がすぐに伝わったらしい。教壇に立った彼女は、目の前の女子生徒に問う。

「あら、みんな静かじゃない。どうしたの？」

「いえ、何でも……。ホームルーム、ですよーね」

返ってきた歯切れの悪い言葉に、いったいどうしたことかと教室を見渡すと、端から端まで俯きがちな顔が並んでいる。

しかし目に見える大きなトラブルはない。なら、ひとまず進めようと、彼女らしいおおらかさと前向きさでホームルームが始まった。

「何があったのかしらねえ？ ま、いいわ。じゃあ、まずは連絡事項ね」

ホームルームと言っても、下校の前に明日の連絡をする程度のものだ。数分で終わり、鏡子は教壇を降りた。

（あれえ？ なんでこんな静かなの？）

いつもであれば放課とともに誘い合って遊びに行く、あるいは部活に行く声が溢れるが、今日は全くその様子がない。反面、それぞれに立ち上がり散っていく様子は、いつもとそう変わりがないようにも見える。

（んー、何かあったんでしょねえ）

彼女は疑問を抱えながらも様子を見ようと、改めて生徒に問うことはせず、廊下へと出た。

同時に逆側の出入り口から教室へに入ったのは、ホームルームの始まりとともに廊下に出た笹原紅深^{ささはらこうふか}である。彼女は無意識のう

ちにある一点に視線を向けるも、そこにお目当ての姿はない。

教室内を見渡してもやはり、彼女はいない。おかしいなと教室を見直すと、森田桐子^{もりたとうこ}と目が合い、紅深は念のために聞いてみた。

「あの、綺月^{きづき}さんは……？」

返ってきたのは、首を横に振る仕草。

そして教室中からの冷たい視線だった。露骨な表情とともに、紅深がいたたまらない雰囲気を感じた。

「え、えっと、そうですか。では……」

心当たりのない彼女だったが、今の状況は容易に理解ができる。自分はこのにいてはならないのだと、そもそも用済みの教室をあとした。

教室から出て行く紅深を見て、隣にいた穂積博徳^{ほづみひろのり}とともに、桐子は溜息をついてしまう。

「悪気は、ないんだろうね」

「みたいだな。……だから止めろって言ったのに」

「今更そんなこと言っちゃって——」

「わかってる、俺が止めればよかったんだよ」

過ちに歯噛みをしていたのは、彼だけではない。教室に残っていたものの全てが後悔を覚え、すでに帰った綺月の、エクレアの席を見つめた。

「紅深先輩、気付いてないのかも……」

周りの暗い顔とは少々違い、桐子は何かを思案しているようだ。らしくない表情に、博徳は察していた。綺月と紅深の関係について、彼女は何か隠している。しかし口をせぬと言うことは、まだ隠し続けるつもりなのだろう。ならば待っていても仕方なからうと、彼はその場を離れた。

「お前たちなら、大丈夫だよな。ここまでやってきたんだ」
 届くことのないその言葉は、廊下の喧噪にかき消された。

佐川^{さがきづき}綺月は紅深が待っていた出入り口とは逆側から逃げだし、
 今なお帰り道を走っていた。

「はあ、はあ、はあ……」

もう走れないと彼女が立ち止まったとき、最寄り駅まではようやくと半分来たあたり。

大した距離ではなかったが、彼女にとってはハードな運動。もう走れないどころか歩くこともならない。両手を膝に当て肩で息をしていると、ふと、意外な声が降ってきた。

「あらあら、どうしたの？」

顔を上げると、おっとりとした微笑む養護教諭、北野^{きたのさきこ}咲子が手を差し伸べてくる。

「……はあ、済みません、はあ、はあ……」

「ひどい顔しちゃって。ほら、涙拭いてあげる」

咲子は力なく乗せられた彼女の手を引くと、スカートのポケットからハンカチを取り出し、泣き崩れた顔を静かに整えた。

泣いている生徒を先生がなだめる。通学路の真ん中で繰り広げられる幼稚園か小学校かという光景は、道行く生徒たちの注目を集めていた。自分のこと、自分と紅深のことで頭がいっぱいの綺月は気付いていないのだろうが、後日噂になっては可哀相だ。

（久しぶりに頼れるお姉さんになっちゃおうかしら）

心配にちょっとした喜びも混せて、咲子は綺月の手を引き歩き出す。

「ここじゃ何だから、ケーキでも食べに行きましょう？」

「……ありがとう、ございます」

咲子が現れなかったら、綺月はどうしていたのだろう。彼女自身そのことをふと思うと、消え入りそうなお礼は口をついて出た。呼吸の整わない綺月を連れて、制服姿が続く道を逸れ人気のない横道を数分歩く。そして咲子は立ち止まり、誘った。

「さ、入りましょう」

彼女は住宅が並ぶ中でやはり住宅のような構えの店を仰ぐと、綺月の手を引いたまま入り口の扉を開ける。

「こんにちは」

「いらっしやい。好きなところにどうぞ」

「はい」

咲子はたった一人いる店員と顔見知りらしく、和やかに会話をしながらテーブルまで歩むと、綺月を席に着かせた。

流れるように羽織っていた薄手のコートを脱ぐと、するつと自らも席に着いてメニューを開く。洗練されたたおやかな動きは、今日も綺月を魅了した。

（私も、先生みたいになったら……）

そんな彼女の視線に気付かないわけでもないが、気付かぬふりをして開いたメニューをテーブルに置く。視線と同じ向き、綺月の方に向けて。

「佐川さんは何にする？」

「あ、はい。えっと……」

「おすすめはモンブラン。佐川さんの好きなレアチーズもおいしいよ」

「じゃあ、モンブランで……」

「うん、おっけー。済みませーん、モンブラン二つ、コーヒーと」

ミルクティーで」

淀みなく注文を入れた彼女の視線は再び綺月に戻される。

「変に気を遣われるのも嫌だよな? 今日、どうしたの?」

小さく頭を傾げて、咲子は切り出した。

話したくなければ話さなくてもいい。彼女はきつとそう続けるだろう。そう言わせることは申し訳なく思えたので、綺月は少し無理をしながらも応えた。

そして今日の一部始終を話すこと数分間。

「——これから、どうしたらいいのかわからないんです」

彼女は今の気持ちを口にして結ぶと、机の下ではきゅっと拳を握る。

一方、正面の咲子は目の前のフォークを手にして、モンブランをすつと切り分けた。

「佐川さん、あーん」

「えっ?」

目の前に持ってこられたフォークに、つい口を開けて。

——ぱくっ

「ふふっ、少しは元気になった?」

「あっ、あ、あわわっ」

にんまりと笑う咲子を見て事態に気付いたのか、綺月は恥ずかしげに慌て出す。

彼女を見て咲子はさらに笑みを深めている。

「ほうら、女の子はものを食べながらしゃべらないの」

——こくこく

「よろしい」

言われた通りに了解を言葉にせず、口の中のケーキを飲み込み、

ミルクティーを一口飲むまで、彼女は無言でいた。その様を見て咲子は溜息をつかずにいられない。

「私なんかより、全然女の子だよねぇ」

「そんなことっ、先生から教えてもらったことだってたくさん……」

「そうだね。でも、恋の仕方は教えなかった」

柔和な表情のまま放つ鋭い言葉は、綺月の動きを止めた。

しかし次の瞬間には、凍て付いた空気も和らいだ。

「私も、みんなも。恋の仕方なんてきつと教わったことないと思う。……笹原さん、あなたの紅深先輩も、ね」

咲子は右手にあったフォークでトントんと唇を叩くと、にこつと笑って。

「私にもあったんだよ? 佐川さんみたいな頃が」

話をしながら、一口分欠けたモンブランを切って食べた。

「今は食べながら話す程度で済んでるけど、昔はもっとひどくてねー。よく言えばサバサバしてる? 悪く言えばがさつ? そんな子だったの」

高校に入学したばかりの頃は咲子とよく話をした綺月だが、彼女の過去は初耳だった。多分彼女は、わざと過去の話をしないようにしていたのだろう。今の綺月には、その気遣いも、気遣いの理由もわかる。

「そんな私だけど、高校一年生のとき、好きな男の子ができちゃったりしてさ」

当時は話せなかったことも、今なら、女同士として話せる。咲子の判断は、綺月にも伝わっていた。

「ところがねえ、全然うまくいなくて。彼にデートに誘われた

とき、真っ正直に『部活だから』って断っちゃったのは未だに後悔してる……」

綺月にも、思うだけだった過去がある。それは未来を決める糧。「恋愛は、佐川さんの方が先輩なんだよ、きっと。ゆっくり教えてあげないと」

窓際の席では、今、夕日を浴びて小さな笑顔が咲いた。

「そう、ですね。少し考えてみます。……すぐには、今まで通りにできないと思いますけど」

「いいんじゃない？ 急ぐことはないと思う。一日二日会わなかったって、死にはしないわ」

「……はい」

「ふうん、今、少し寂しいなとか思ったんでしょ？ あーあ、ごちそうさま」

これで全てが解決したわけではない。けれども、前に進むだけの元気は出ただろう。咲子は先生としての時間を終えると、よしなしごとを話しながら、お茶の時間を楽しんだ。

「今日はありがとうございました」

定刻にやってきた電車に乗り込む咲子を、綺月はべこりと見送る。

「どういたしまして」

背中を見せて軽く手を振った咲子は、振り返ると。

「私に話せなかったことは、森田さんや、穂積さんに相談するのよ？ バイバイ」

ドアが閉まる直前にそう言い残し、去っていった。

喧噪のやまぬプラットフォームに残された綺月は、小さく目を

見開いた。

「隠し事は苦手です……」

彼女は知らずのうちにこぼれた微笑みに勇気づけられ、桐子に相談しようと帰途の一步を踏み出した。

一方、すでに帰宅していた紅深は制服姿のままベッドに転がっている。天井と対峙するのは晴れない表情だった。

(大したことではないと思いますが……)

枕を抱いて右に左に。不規則に揺れながら、思索に耽っている(今日の綺月さんは、何かが違ったような気がします。私が待っていたのに先に帰られたと言うことは、私と帰りたくなかった……)

冷静な考察は彼女らしい。しかし彼女自身、その冷静さには若干の不備があることに気付いていた。

(どうして逃げるように……？ いいえ、違います。そもそもなぜ、私は、私と綺月さんが一緒に帰ることを当然と考えているのでしょうか……)

綺月にとって、紅深と帰ることは要件でない。深呼吸をすると表情を消した紅深は、改めて考えた。今日、綺月が紅深と帰らなかったこと。それは、注意するに値することなのか。

(彼との約束と斥候は信用できます。彼女の身に危険が及んでいないこと、周りに大きな危険がないことは間違いないでしょう。常時であればともかく、帰り道だけ一緒にいることが必要とも、有効とも考えられません。今日のことを気にする理由はありません)

結論は出た。問題ない、考えなければならないことはこれ以上

ない。

はずなのに。上体を起こした彼女は、むぎゅっと枕を抱きしめる。

（それでも気になるのはなぜでしょうか？ 何か見落としがあるのでしょうか？）

腕の中の枕に頬を預けると、ひんやりとした冷たさが伝わってくる。

（綺月さんは、温かったです……）

つい先日、この部屋であったことを思い出して、彼女に穏やかな笑みが戻る。

（綺月さんは恥ずかしそうで、きっと望んではいませんでした。それでも私は、綺月さんに抱いて欲しいと願った……。あのときすでに、何か誤っていた……）

己の判断に誤りがあったとすれば、紅深にとっては一大事だ。しかしもう、今の紅深はその大事にすら気付かなかった。

（でも、私は、望んだ……。どうして……）

§

「いったい何なのよ、あの暗いのは」

「それを、私に言われても……」

翌日になっても暗いままの我がクラスに痺れを切らし、鏡子は原因の側近たる桐子を呼び出した。

「聞いたわよ。佐川さんと笹原さん、何かあったんでしょう？」

「それはそうですけど……」

小さなテーブルでお弁当を挟んで向かい合う。

鏡子は悪者を問い詰めるかのように、じわりじわりと顔の距離を詰めてきている。

「仕方ないじゃない。佐川さんのことはあなたに聞くのが一番なんだから」

「そ、そんなの本人に聞いてくださいよ」

ついにはひっきりきそうになった顔に桐子は仰け反りそうになるも、鏡子の方が先に脱力して離れた。

「聞いたら苦勞しないって……」

一口も付けていないコンビニ弁当をつんつんと割り箸で突きながら、彼女は頭を垂れている。

桐子の言うことは尤もだ。それは鏡子にもわかっていたが、綺月に直接「何とかしなさい」とも言いにくかった。鏡子とて、彼女の事情はわかっている。静かに見守るのが一番だろうとも頭ではわかっていたが、身体が言うことを聞かないのだ。

「あーっ、もうっ、コーヒーちょうだい、コーヒーっ！」

「はいはい……。保健室は生徒指導室でも、ましてや喫茶店でもないのよ？」

頭が沸き立っている感のある彼女に、注文通りのコーヒーを差し出したのはこの部屋の主。白衣の咲子だ。

「済みません……。鏡子ちゃんがご迷惑をおかけいたします……」

「……生徒に謝られる先生って、どうなの？」

「どうもこうもないわっ。咲子さんだってうちのクラス来たら発狂しますよ？」

真っ白なカップを一気に煽ると、カチャンと戻し。

「今朝なんて——」

愚痴を続けようとした鏡子を、咲子は止めた。

「はいはい」

彼女はくくーっとその辺のいすを引っ張ってくると、二人と三角形を描くように座り、あっさりと言った。

「心配なのはわかるけど、あなたに恋愛相談は無理でしょう？先週も、先々週も合コンに惨敗。付き合わされる身にも——」

「ちょ、ちょっと、生徒の前でなんてことを——」

「へえー、鏡子ちゃんってばそんなにがつついてんだあ？」

「う、うるさいうるさいうるさい。私だって彼氏欲しいのよっ！」

咲子と桐子の蔑んだ瞳に落胆激しい鏡子は、手つかずだった弁当をむしゃむしゃと食べ出す。

同時に彼女の視界から外れた咲子は、桐子に小さく目配せ。そして桐子もそれに応じた。

（聞いているのでしょうか？）

（はい。昨日はありがとうございました）

二人が揃って微笑み納得し合っていると、半分が消えた弁当を机に戻した鏡子が再び話し出し。

「だいたいねえ、高校生が恋愛なんて贅沢なのー！」

二人は揃って、溜息をついた。

「……それで、悩みは何だったかしら？」

ティーカップを手にながら鏡子が改めて水を向けると、咲子は脱線していた自らの話を戻す。

「佐川さんと笹原さんが喧嘩かなんかしたみたいで、うちのクラスがどんよりなの！」

「なるほどねえ。佐川さんって、クラスを左右するほど目立つ子

だったっけ……？」

咲子の指摘にはっとして、鏡子は箸を置いた。

綺月はクラスの中でこれと言って目立つような子ではなかった。目の前にいる桐子は、容姿も行動も目立つ子だ。しかし、いくら彼女の隣にすることが多いからと言って、綺月が特別注目される子ではなかった気がする。相手の紅深にしたって、そう目立つタイプではない。

「言われてみれば……。エクレアさんの影響？」

目立たなかった二人が注目されるとすれば、もう一人の鍵が原因だろうか。しかし、彼女がくる前から、二人を「お姉様と妹」と話題にしていた。

「違う、その前から……。確かに、なぜかしら……」

「森田さんはどう思う？」

すっかり落ち着いて首を傾げる鏡子の向かいで、水を向けられた桐子は探り探り答えを發した。

「私にとって綺月は特別なので、わかりませんけど……。自分にもあんな彼氏、彼女がいればなって思ってるのかなあ」

「そうかもね。ごくごく普通だと思われていた佐川さんが、一目瞭然、素敵な恋をしている。もしかしたら私にもという共感が、彼女への注目に変わったのかも知れない」

「なるほどねえ。確かに、毎日迎えに来てくれる可愛い彼氏……」

「イイ！ 凄くイイ！」

妄想を交え、強く頷く鏡子。

スキリした表情を混ぜながらも、引き続き呆れ顔で鏡子を見つめる桐子。

納得した二人を眺めながら、仮説を立てた当人の咲子は落ち着

かないものを感じていた。多少の憧れだけで、クラス全体を一喜一憂させられるのだろうか。何かもうひと味あるのでは。しかし答えは思いつかず、思いつかないことで先に進まぬわけにもいくまい。

「だから、たとえ暗くたって悪いことではないんじゃない？ 萩先生もゆっくり見守ってあげなさい」

「はい、そうします」

すんなりと受け入れた鏡子に、咲子は自分の思い過ぎだろうかと、引っかけたものを流すことにした。

時を同じくして、いつもなら桐子もいる屋上では、残された博徳と綺月が昼食中。

「落ち着いたのか」

「ごめんね、昨日は。あのあと、北野先生と桐子が相談に乗ってくれた」

「久しぶりに聞く名前だな」

先に食べ終えた博徳が、ボタンと横になりながら返事をした。

無表情が眺める先は、今日も真っ青、屋上は昼寝日和だ。

「うん、今でもたまに保健室に行ってるんだけど。ちゃんと話したのは久しぶりだよ」

紅深とのもう一つの関係を伏せた咲子との話ではもちろん、桐子との話でも、綺月は答えを見いだすことはできなかった。紅深がどうして、綺月と一緒にいるのか。

「それで、なんて言ってた？」

紅深の気持ちはわからない。けれども、綺月の気持ちは決まった。

「んー、『がんばれ』ってことかな」

「らしい答えだ。好かれるより好きでいること、とか言いそうだよな」

「うん、そうなんだと思う。でもやっぱり、すぐには変われそうにないけど」

手製の弁当をゆっくり食べながら、綺月は続けた。

「考えたんだけどね、私、怖がってるのかも知れない」

「……？」

「先輩のことが好きで、ここまで来ちゃったけど。私が私でいるって、本当は、おかしいことだよな？」

自らを嘲るような薄い笑みで、彼女も天を仰いだ。

がむしゃらに、ひたすらに走ってきたから気付かなかったけれども。紅深と近づいて、願いが叶いかけた途端見えてきたもの。

それは散々言われた、博徳にも言われた、幸せだけではないものだった。

「だから言っただろ？」

わかっている。言われなくてもわかっている、つもりだった。

けれどもわかっていたいなかった。

綺月は逃れられぬ辛さに耐えるべく、視界を真っ青から真っ黒に切り替えた。そのとき。

「既成事実を作っちゃえばお前のものだって」

彼の口から聞こえたのは、卑俗ながらも甘い言葉だった。目を見開いた彼女が下方に視線を移す。そこにあったのは、紛れもない笑顔。

「犯罪だよ？ そんなの——」

今は笑顔を見ることが辛くて、彼女はわざと視線を外した。

ちょうどよく残っていたウサギ型のリングを食べ終えると、弁当箱をしまつて。

「でも、がんばるよ」

勢いよく立ち上がった。

眼下に見える博徳は、やっぱり笑っていた。

「パンツ、見えてるぞ」

「えーっ。もうっ、『がんばれ』って笑顔だと思ったのに」

慌ててスカートの裾を押さえると、彼女はちよつと膨れっ面。

同時に博徳は、溜息でもつきそうな苦笑いだ。

「いや、そうだよ……。俺がお前のパンツ見ても嬉しくないだろ

……」

「あ、そっか……」

綺月の気の抜けた反応に、お互い笑い合う。

放たれたスカートの裾は秋風に揺れて、再びその中を露わにした。

§

定期試験前のような緊張感が教室を支配する放課直前。

「明日は休日、一日早い週末ね。みんな、よい週末を！」

鏡子がおなじみの挨拶をすると起立の号令もなく、みんなが席を

立った。

「ありがとうございました」

角度にバラつきのある礼とともに、状態は放課後へと遷移。

いつもであればあつという間に教室を去る鏡子が、今日は柄にもなく黒板を消して待つその瞬間は。言うまでもなく、綺月の元

に紅深が現れる瞬間だ。

（あーあ、私も生徒と同レベルか……）

鏡子が苦笑したように、自席に残っているものがいつもより多いのは言うまでもない。部活で都合が許さぬ生徒たちも、後ろ髪を引かれながら出て行くといった様子だ。

（妹の綺月ちゃんは何やら持ち直した模様、これなら大丈夫かな）

午前中は暗さが支配したクラスの雰囲気も、今やだいぶ和らいている。今日一日みんなが観察した結果、綺月はどうも復調したらしいという判断が主流になっているようだ。おかげで緊張感はあるけど、昨日、今朝のいたたまれなさはなくなっている。

「どんなもんよ？ 桐子お姉様がばっちり解決しちゃったわけよ」

桐子と博徳も先行きを楽し観した様子で、壁際に立っていた。

「解決したのは北野先生だって聞いたぜ？」

「今度ばかりは、それも否定しないわ。悔しいけど経験の差ね

……」

桐子がにやりと横を向くと、珍しく博徳も、柔らかな表情で応えた。

たった一日間の長いトンネルを抜けられることに、二人も、周りのみなも明らかに祝福ムード。

――。

――。

――。

しかし、事はそううまく運ばないようだ。

数分後、十数分後、徐々に空気は焦りに変わる。

（まさか、あの先輩が……？）

予想を裏切って、いや、予想の範囲を超えて紅深が教室に現れなかった。

天真爛漫と言おうか、能天気と言おうか、いつも「綺月さん」と言っていることが決まっている彼女が、あろうことか今日は現れない。

「どうすんのよ……」

「こりゃ番狂わせだな」

小声で事態に感嘆する二人を気にすることもなく、窓際の綺月は動いた。

ついには諦めたのだろうか。いつの間に悲壮さが占める教室の中、彼女は笑顔で、出入り口そばの二人に声をかけた。

「今日は私が迎えに行くね」

トントんと軽いステップで教室を出ると、言った通りに紅深の教室へと向かうのだろう、昇降口行きとは逆の階段に歩いて行った。

（なんか、これはこれでよかったんじゃないか？）

（綺月さん、カッコいいね）

彼女がいなくなった教室は、すっかり緊張が解け、紅深を迎えるいつもの教室に戻っている。とくに黒板を消し終わり、窓の外を眺めていた鏡子も胸をなで下ろしていた。

「ご苦労！ 私は帰る！」

みなに声をかけた鏡子に応じて、生徒たちは揶揄するようにおなじみの挨拶を返す。

「よい週末を！」

「ありがとうございます」

鏡子はフレンドリーにも生徒役を演じて、教室を出て行った。

続いて教室に残っていたものが次々帰途につく中、壁際の二人は若干硬い表情を崩していない。

「頼んだ」

「……そうね。紅深先輩が来ないってことは、休みか、帰ったか。綺月は泣いて帰ってくるんだろうなあ」

頭が痛いと言わんばかりに首を振りながら、紅深も部活へと向かうべく教室を出る。しかし博徳が見た彼女の瞳には、安堵の色が見て取れた。

「難しいもんだな……」

誰に言えることでもなく独りごちると、彼も教室を出て行った。

二人の予想は見事的中。紅深はその頃、制服を着たままベッドに倒れていた。

（はあ……、私は何をやっているのでしょうか……。身体はどこかが不調というわけでもないのですが……）

日は暮れ真っ暗な窓外を眺めながら、彼女は今なお思索に耽っている。

（なぜ、学校をお休みしたのでしょうか……）

綺月をどう捉えるべきなのか。昨晩からずっと、この部屋の中で考えてきたが答えは出なかった。考える前は問題でもなかったのに、考えてしまうとそもそもどうして問いに辿り着いたのかもよくわからず、挙げ句の果てには今日の休みだ。

（行きたくないと直感が言ったのには、何か理由があるはずですが……。私の直感は信ずるに値します……）

部屋から一歩も出ず、今日も一日考え通したが、結局出口は見えぬまま。

考え通したと言うよりは、考えることもできずぼーっとしていた時間の方が長かったろう。このこと自体、彼女自身に理解できない異常事態だ。

（はあ、どうしたら解決するのでしょうか……）

まるで動きを封じられてしまった彼女だが、突如、光が差した。

——ピポピローン♪

制服から鳴った音は、携帯のメール着信音。

左ポケットに手をつ突っ込み端末を取り出すと、パカッと開いた。

新着メール1件

表示に従い、慣れない手つきで端末を操作する。

紅深が携帯を使うことは滅多にない。高校生なら誰もが持っているという情報に基づき、持っているだけだった。そんな彼女が、最近携帯を操作したのは。

（綺月さん、かな……？）

先日の夕食の際、メールアドレスを交換したことを思い出しながら、メールを開くと。

FROM…佐川綺月

SUBJ…お大事に

果たして綺月からのメールだった。

風邪でお休みと伺いました、具合はいかがですか？

早く元気になってください

（綺月さんっ）

画面に表示された彼女の名前をもう一度確認すると、紅深は返信ボタンを押しかけた。しかし押すことはせず、トンとベッドを飛び降りる。

（行きましょう、綺月さんのところに）

なぜ行くのか、行ってどうするのか、彼女は全く考えていない。考えなければならぬとも思っていないのだろう。

（迷うなんて私に似合いません。まずは行動です）

一直線に玄関に向かうと、制服の一部であるローファーを突っ掛けて自室を飛び出した。

§

紅深が一度歩いた道を忘れることはない。道に迷うこともない。（はあ、着いてしまいました……）

彼女の心中がどうであろうと、身体は勝手に動いた。あつという間に綺月と桐子の家の前。

（今更ですけど、どうやってお邪魔したらよろしいのでしょうか……）

呼び鈴のボタンを押しかけては、手を離す。

何度目かの迷いの後に、彼女はまた、唯一灯りのついた部屋を仰いだ。

（今日は綺月さんの部屋だけに人がいらっしやるようです）

隣り合った二軒の家、綺月と桐子それぞれが二階に部屋を持っているが、今日、人がいるのは綺月の部屋だけのようだった。

（桐子さんも、いらっしやるのでしょうか。——私は、なぜこんなことを……）

ふと生まれた心配に戸惑いを示しつつも、「行動あるのみ」を推す身体が、また呼び鈴を押そうとする。すんでの所で心が止める。そして、また迷おうとした刹那。

「誰？」

ふっと現れた気配から遠ざかるよう、右足を蹴って斜め後ろに下がる。

「……彼の部下ね？」

男女の区別がつかない中性的な顔を見て、紅深の感覚が何者かを判断した。

彼女は判断を疑うことも、返事を待つこともせず、下がった距離を数歩で詰めると。

「状況はよくないのね——」

己の唇と目の前の唇を合わせ、目を見開いた。

「そんなバカなっ」

ひどく驚いた様子の彼女が歯噛みをしたときにはもう、二人の姿は消えていた。

次の瞬間、紅深は先ほどまで散々様子を伺っていた部屋に現れた。

「ふえっ？ く、紅深先輩っ」

紅深の突然の訪問に綺月が驚く。

「綺月さん——っ？」

そして紅深も、予期せぬ存在に驚かざるを得なかった。

「お待ちしておりました、紅深隊長。とお呼びしましょうか、こちらでは」

「ユーミル、なの？」

「はい。彼に聞いて、表の彼女と一緒に参りました」

紅深と綺月の間にいるユーミルと呼ばれた女性は、淀みなく立ち上がると紅深の方を向く。そして彼女を凝視すると、気の抜けた雰囲気であうた。

「……話には聞いていましたが、何です？ その格好」

「こちらではこれが普通なんだが」

ひょうひょうと答える紅深だが、彼女は納得がいかないようだ。自身のコンプレクションウェアとの、短髪との違いがあまりに不合理なのだろう。しかし彼女は疑問を続けることなく、紅深が来る以前の表情に戻した。

「雑談はあとにしましょう。状況を伝えたいのですが、よろしいですか」

「ええ」

二人は小さく一歩ずつ詰めると、唇を重ね。数秒後にまた、離れる。

「俄には信じ難いな」

「事実です。彼の部隊の斥候は優秀です。悔しいことに、私の部隊のものより」

「ああ、疑ってはいない。しかし、なぜ私が、気付けない……」

「対神魔ステルス。私も信じられませんでした……」

苦虫を噛み潰したような顔で窓の外を睨むも、紅深の視界には夜の闇と、住宅の灯りしか見えない。

「数えるほどしか術者がいないんだぞ。……それほどまでに重大とすることか」

ユーミルも紅深と同じく闇へと視線を向ける。やはり何も見えないが、すでに包囲されている認識を改めることはなかった。

表情を消し、窓外を眺める二人はとても落ち着いているようにも見えた。しかし、内心は気がでないのだろう。それは彼女を忘れ去っていることから明らかだ。

「……あ、あの……」

消え入りそうな声に紅深が振り向いたとき、さらに余裕のなか

った心中が露呈する。

——トントントントン

部屋の入り口からノック音がしたかと思うと、次の瞬間には扉が開いた。

「笹原先輩、いけませんよ？ 彼女の前でキスなんかしたら」

「エクレア、さん……？」

現れたのはキュートな少女、エクレアだった。

あどけない笑顔はいつもの通りだったが、口調や声のトーンはまるで別人。しかし、紅深が驚いたのは彼女に対してではない。

（バカな、全く気付けなかった……。動揺しているというのか、この私が……）

再び渋い表情とともに、強く拳を握る。

対するエクレアは、眼下の状況などお構いなしで続けた。

「落ち込むところが違いますわ」

大きく頭を振ると、彼女はその場で屈んで、綺月と視線を合わせる。

「ええ、びっくりして当然よ。大好きな先輩が目の前でキスしちゃったんだもの」

口をぽかんと開けて反応できずにいる綺月に、エクレアは顔を近づける。話をする距離、見つめ合う距離、そんなものをとくに通り越して、お互いがふれあいそうな距離まで。

放心状態の綺月にも、次の瞬間は予期できた。しかしその予期は、僅かに遅かった。

「——んっ」

粘膜の重なり合い特有の柔らかさ。鈍く伝わる体温が綺月の脳に、目の前で起きていることを伝える。

数秒間の行為の後、エクレアは唇を離す。

「さて質問です。私は誰でしょう？」

突然の質問に紅深とユーミルは訝しんだが、綺月は当然のように口を開く。

「巡回監査神、エクレア。……えっ？ どうして」

「所変われば品変わる。キスに意味を付けるのは、キスをする行為者よ」

答えておきながら不思議がっている綺月に答えを返すと、彼女は踵を返す。

「私は桐子さんのところに行くわ。あ、これはプレゼント」

エクレアは去り際にパンと手を叩き、部屋の外へと消えた。

残された綺月は、ぽかんと呆気にとられていた。

「それじゃあ、紅深先輩のキスは……」

いや、彼女だけではない。理由は違えど、彼女たち全員が呆気にとられていた。

「なぜ、監査がこんなところに……。巡回監査と言ったら、かなり上級の位ですよ？」

「理由はわからないが、本物のようだ。外を見ろ」

「あっ……」

紅深に促され見直した夜空には、聞いていた通りに数十の人影、元い、神々の影が見て取れた。

「数えるほどじゃないうちの一人が、すぐそばにいたようだ」

紅深は己の目の悪さを嘲笑しながら、屈み込んで綺月と向かい合った。

考えてみれば、ここに来た理由だってよくわかっていないのだ。今更見えていぬことが一つや二つ増えても、落ち込む必要はない。

前向きに思い直すと、一つだけ、ハッキリしていることを目の前の彼女に伝える。

「綺月さん」

「は、はい」

「少しだけ、時間をください。終わったら話したいことがあります」

「……はい」

放課後の教室で、共に歩む帰り道で、道を分かつプラットフォームで、二人が見せ合ってきた笑顔を今日も交わす。

ぴったりあった一呼吸の後に、互いに笑顔を消す。そして紅深は立ち上がり、綺月は膝を強く抱いた。

「ユーミル、広域攻撃魔法を」

「了解。ですが隊長、私が使えるのは神術でして……」

応答を苦笑とともに返しながらか、神術を補助するためのスタツフ^{長尺の杖}を出現させる。

「神術で神は殺せぬと教えただろう」

「済みません、ですが……」

彼女は申し訳なさそうにしながらも、背丈の二倍近くあるスタツフを正面に構えた。その先端はいつの間に関け放たれた窓の外に繰り出しており、冷たい夜風に吹かれている。

「はあ、やむを得ないか……」

紅深も苦笑混じりに答えると、ふるっとスナップを利かせて両手を振り、半透明のナイフを握った。力強い刃は使途に似つかわしくない、清楚な輝きを放っている。

背後では綺月が、意外にも目を背けず、事の成り行きを観察していた。

（エクレアちゃんの教えてくれたことは、本当だったんだ……）
緊迫する二人、騒然とする夜空。エクレアが唇を通じて伝えてきた情報と一致している。

（だったら、私にできることは……）

綺月は意を決して、一度強く強く膝を抱いた後に、腕を解き声を放った。

「紅深先輩っ」

「どうしたの？」

さすがに綺月の動きは常時把握できていた彼女が穏やかに応答する。その間、綺月はゆっくり立ち上がろうとして、バランスを崩し、それでももう一度立ち直った。

「私の気持ち、受け取ってください」

小さく一歩、触れるには遠かった距離を詰めて。

綺月は自身の唇を、紅深の唇に。背伸びをして、ただ顔だけを寄せて、無理矢理に押し当てる。

（好きです——）

たった一言を紡ぎ繋がりを解くと、綺月は朗らかに改めて言葉にする。

「好きです、紅深先輩。だから——」

「はい、長くは待たせません」

一言分だけ表情から苦みを取り去った紅深だが、すぐさま綺月には背中を見せ、窓の外を目視した。同時にナイフを握り直す姿に、綺月は再び、部屋の隅で小さくなる。

綺月の姿を背後で感じた紅深は、視線をそのままに、横に控えるユーミルに念のための確認を入れる。

「準備はいいな？」

「はい、隊長」

ユーミルの声を聞いて、紅深は一步――
バタンッ

踏み出す前に、勢いよく背後の扉が放たれ、緊張感のない声が響いた。

「おいおい、そんなへなちょこスタッフじゃ勝てないだろ」

（誰??）

（バカな、また気付けなかっただろ?）

二人揃って背後を振り向いた瞬間、声の主は横行に続けた。

「今日もあるぜ。とっておき、持って行くかい?」

「英一ッ」

彼の姿はいつかと違っていた。しかしユーミルをユーミルだと見抜いた直感、彼を相沢英一だと見て、紅深は警戒を解く。

一方、彼と面識のないユーミルは身構えているようだ。

「……隊長、お知り合いですか」

「ああ、まあ。だが話はあとだ。あちらが待っている理由がわからぬ今、とっとと片を付けよう」

一同夜空を確認し直すも、やはり動きはないようだ。紅深の言う通り、なぜすぐに動かないかは不明。異かも知れない。しかし待つて殺される必要はないという彼女の判断は、ユーミルも、現れたばかりの英一も支持しているようだ。

小さく頷いた英一はなぜか膝をつく、軽く開いた掌にふうつと鈍色の棒を出現させる。ユーミルの腕ほどある太さ、彼女の持つスタッフよりさらに長い棒だ。

「ほらよ、持ってけ」

現れた棒はユーミルの両足の間隙を縫い、夜空へと伸びていた。

「……やることが下品ですよ」

呆れる紅深、鋭い眼光を維持するユーミル、顔を赤らめる綺月。にたにたと卑猥な表情を隠さず、英一は続けた。

「いいねえ。気が強そうなのも、恥ずかしそうなのも、実にいい。と、それはさておき。こいつは神魔力変換スタッフ、神魔不可侵条約締結時に交わされた四本のうちの一本。見紛うことなき本物だ」

「と、盗品じゃないですかッ」

どうだ凄いだろう? と誇らしげに解説を終えた彼は、予想通りの反応を得て大満足の様子。勢いづいて弁ずる。

「おいおい、そう決めつけるのはいけない。落とし物かも知れん」

「そんなの詭弁ですッ」

いかがわしいと目した英一から出てくる文句が、これまたひどく胡散臭い。ユーミルは真つ向から否定すると、公正な判断を仰ぐべく紅深に視線を送る。しかし、返ってきた指示は予想外のものだった。

「まあ待てユーミル、今、これが必要なのは確かなんだ」

「しかし隊長……」

己のために正義を曲げるなど許し難い。正しい判断を下すユーミルを、かつての紅深は常に支持していた。それが今、初めて、覆された。彼女がここに馳せ参じた理由は、ここにいるのが紅深だからだった。故に、正しい判断を否と言う彼女に承伏したくはなかった。

紅深とて彼女の気持ちはわかっていった。故に、多少の御為ごかしを含まざるを得ない中でも、正しき道を示すことは忘れない。

「お前の言うことは正しい。しかしそもそも神魔力変換スタッフ
がどのように扱われるべきものか、わかっているだろうか？」

「互いに不可侵とする代わりに、己で律するため……」

「ああ、そうだ。今がそのときとは言えぬか？」

「しかし隊長、我々がもし誤っていたら」

「ユーミルが来てくれたんだ、誤りがあるうわけもない」

「……ずるいです。でも、隊長が信じてくださる私を、私も信じ
ます」

彼女は肝を据え、股下を通るスタッフを握りしめた。

その様にやつく視線を感じて、紅深はすかさず指示を出す。

「ユーミル、スタッフを足の間から外しなさい」

「はいっ、了解です」

「ちい」

「……………」

聞こえてきた舌打ち、小さな安堵の息づかい。

殺されようとしているときに、目の前の出来事に気が緩んでしま
う。紅深は何とも妙なものと、半ば呆れながらも感心してい
た。

（やはり平和ボケかも知れないな）

そして表情も緩んだままに、彼女は再び声を上げた。

「私は前に出る。ユーミル、露払いを頼む」

「了解」

ユーミルの応答とともに紅深の姿は消え、夜空には見慣れぬ閃
光が瞬き始めた。

自軍の存在に感付かれているとは思わなかった総勢三十八名の

部隊は、一瞬で半減し、その後も急速な隊員の消滅が続いている。
「参ったな。ステルスを解除されたとなると、いよいよお上もど
うなったことか」

「とつくに陥落だろ。しかし精鋭として集められたのがこのさま
とは」

目映い光の中に消えゆく友軍を見ながら、若干離れた位置で眺
める影が二つ。不揃いな高さの影が、夜空にぼつんと浮かんでい
る。

「ターゲットはあいつか。大したものだ、立ちふさがるものは皆
殺しだぜ」

「すでに八体撃破、ネイティブの魔法使いは違うな」

彼らの目には今、猛然と向かってくる少女の姿が捉えられてい
た。

彼女はまた一体の障害物を消し去り、ついには二人との間を虚
空とした。

「しかし契約は履行せねばなるまい。行くぞ」

「あいよ」

身体のだこを動かすこともなく加速し、二人は空を滑る。

刹那、急進してきた紅深は腕を広げ、両横の一名ずつに刃を向
けた。

「ひょいっと」

「あんま余裕抜いてんじゃねえぞ」

すれすれのところで切っ先を交わした二人は振り返り、背後に
抜けた紅深を視界に収めた。

「ホントに人間女性の身体じゃねえか」

小さく驚いた長身の方がナイフを両手に出現させると、軽やか

に踏み出した。

紅深に真正面から突っ込んだ長身は、掲げた右手を勢いよく振り落とす。ずんぐりとした刃は骨まで砕かんと襲いかかるが、大きな動き故に紅深は難なく躲し、小さくナイフを繰り出した。

「そりゃ反則だろ」

長身は紅深のストロークを大幅に超えて後退して、苦笑いを浮かべている。

「私は単なる刃物で殺せるが、お前らは違うだろうか？」

一方不敵な笑みを浮かべた紅深は、左手からやや後方に向かってナイフを投擲。

「おっと、こちらも見えていたか。なら遠慮はいらないな」

短身の方もやはりナイフを握り突っ込んでくる。応じて紅深は後方に意識を向ければ、逆側では長身が踏み切った。

紅深は二人の描く直線から外れるように身体をずらし、まずは短身の方に左手を一振り。新たに生み出したナイフは、彼に届かない。しかし、紅深は迷わず身を翻しながら屈め、長身の懐へとナイフを差し込んだ。

差し込んだはずだった。

しかし、紅深の目の前にはすでに誰もいない。彼女の後方でふわりと優雅に浮いていた。

紅深が振り返ると、二人が並んでいる。自然体の長身には歯噛みをしながらも、短身の身体状況には十分満足できた。

「あのナイフ、魔法がかかってやがる」

下半身を失い、腹部で綺麗な断面を曝した短身が憎々しげに吐き捨てる。

対して紅深は無表情に返した。

「ああ、そうだ。神相手なら刃が触れる必要はない」

同時に、何もない闇夜を蹴って、再び二人に迫撃を開始できない。

動きが止められた？

彼女が事態に混乱する間もなく、戦場には凜とした声が響いた。

「まあ待て、諸君。クーデターは成功した、もはや戦う意味などないぞ」

紅深の動きに応じてやはりナイフを構えんとした長身も、動き半ばで止まっている。

さらには少し離れた場所で継続していた戦闘も、バタリとやんだ。

「殺害の特務を命じられた者よ、もはやその命令は失われた。新たな最高神は即刻帰投を命じている」

またもや突然現れたのはエクレアだった。

相変わらずの少女趣味な格好をしながらも、戦場たる夜空で一人、己が意思で腕を上げた。

「改めて命ずる。特務部隊は即刻帰投せよ」

彼女の声に呼応して、ユーミルの魔法を浴びていた影は一人、また一人と消えていった。

未だ身動きのとれぬ紅深の眼前でも、同様。

「やはり陥落したか。ならば引こう」

「ああ。お嬢ちゃん、騒がせて済まなかったな」

一言ずつ残した二人は、次の瞬間消えてなくなった。

そして不意に、紅深の身体が動いた。突然のことにつんのめりそうになったが、幸運にも宙に浮いていたためどこにぶつかることもなく。ただ、その姿を笑われるだけにとどまった。

「ふふっ、魔法使いも形無しね。さ、戻る……その前に」
 エクレアはふらっと紅深の前に寄ってくると、ちょこんと唇を啄んだ。

「わかった？」

怜悯な瞳でスマイルを作ると、彼女はその姿を消した。

残された紅深は目を丸くして息をのんだが、慌てて後を追い、
 綺月の部屋へと飛んだ。

穏やかさを取り戻した綺月の部屋には、定員オーバーと言いたくなるほど人が入っていた。余計なものはなく整理された彼女の部屋でも、さすがに手狭だ。

「隊長、お見事でした」

疲れた様子も見せず、キリッと直立するユーミル。

「早く決着がついてよかった。まだどこかでな、お嬢ちゃん」
 背を向けたまま小さく左手を振り、部屋を出て行く英一。

「桐子も綺月も、怪我はないか？」

頭のおっきなリボンが不似合いな、本来の言葉遣いを出したままのエクレア。

「うん、大丈夫。それにしても、エクレアちゃんが紅深先輩と同じだなんて……」

驚きながらも楽しげに笑う、彼女が急ぎ迎えに行った桐子。

「情けないことに、私も気付きませんでした……」

先ほどの戦いで傷んでしまった制服が不釣り合いな紅深。

「みんな、無事でよかった……」

今になって涙が止まらなくなってしまった綺月。

一名は去ったものの、五名が六畳一間に会している。

「『みんな』じゃなくて『紅深先輩』でしょ？」

「そ、そんなことないよっ」

顔を真っ赤にして反論する紅深を見て、桐子はもう少しからおうかとも思ったが。今はそれよりも気になることがある。

「結局、何がどうなって、丸く収まったの？」

問い質すべく強い視線をエクレアに送ると、彼女は参ったなと肩を竦めている。

「神様たちの争いごとに、綺月さんと紅深さんの仲を使わせてもらったのよ。綺月さんにはもちろん、桐子さんたちの迷惑になったことは謝るわ」

「……謝られても全然わかんないんですけど？」

「そう言うと思った。下のフロアに行きましょう、ゆっくり説明してあげる」

わけがわからないと怪訝な顔をする桐子の手を取り、エクレアは部屋を出ようとする、その前に。

「ユーミル、あなたも来なさい」

紅深の横で控えていたユーミルも階下に連れて行くべく、声をかけた。

しかしユーミルは動こうとせず、見るからに「いいえ」と言わんばかりの状態である。そこでエクレアは伝家の宝刀を抜き、連れ去ることをためらわなかった。

「命令よ、いいわね？」

「はい……」

ユーミルは彼女の言葉に、やむを得ず従い、後を追って部屋を出て行った。

「えっ、あ、あの、みんな……」

綺月はやっと気付いて、涙を止めて慌てるも、時すでに遅し。部屋に残されたのは綺月と、紅深だけ。

「あ、あの……」

今度のうろたえた声は、紅深に向けられた。

紅深には言いたいことも理解できたようで、素直な反応を返す。

「何でしょうか？」

「その、さっきの……」

消え入る声を見ぬように、紅深は声を床に落とした。

「キスは、情報交換の手段に過ぎません」

「……………」

「でも今は後悔しています、ユーミルとキスをしたこと。綺月さんとエクレアさんが、キスをしてもいいなんて言ったこと」

綺月が急に顔を上げると、見えたのは紅深の形いい頭。どんな表情をしているかはわからない。

「端的に言って、私は、恋愛を知りません。だから——」

「それなら私と一緒に、その、勉強しませんか……」

身を屈めた綺月は紅深との距離をゼロにした。

「んっ——」

「……………」

唇を重ねた綺月は、彼女にとっての恋愛の全てを。昨日のことを、一昨日のことを、一昨昨日のことを。あの日、心を決めた日からの想いの全てを、紅深に伝えた。

「っ、はぁ……」

「ありがとうございます……」

数十秒続いた行為は、彼らにとって最後のキスになるのだろう。僅かに離れた紅深の顔が赤らむのを見て、綺月もやっと、自分

のしたことに気付いたようだ。

「あつ、えと、あの——」

強く握っていた紅深の両肩を開放すると、あわあわと後ずさってベッドに倒れ込んでしまう。

——ポフッ

予期せぬ転倒に驚き目を閉じた彼女に、直後、ベッドの沈む感覚が伝わってきた。

まさか。考えるよりも早く、彼女の身体が目を見開かせると。

「綺月さんはどうして、女の子の格好をしているんですか？」

近すぎる声の主、視界には紅深の顔しか見えない。

仰向けに倒れた綺月の上には、紅深は四つん這いで覆い被さっている。

「そ、それは……」

早鐘を打つ胸に思考を妨げられ、言葉を紡ぐこともままならない。これ以上は何もかもが耐えられない。

窮地で彼女に突きつけられたのは、紅深のまっすぐな一言だった。

「男の子として、私とセックスしたいんですよね？ ……なのに、どうして？」

「ふえっ、っ——」

目の前に、触れそうな距離に、彼女の唇があるだけでも限界ギリギリなのに。

その唇から卑猥な言葉を発せられようなど、耐えられるわけがない。紅深の声よりも脈動の音が大きく聞こえるほどの緊張が彼を襲う。

「なるほど。エッチの経験は紅深先輩の方が上なのね」

「そりゃそうよ。彼女はプロよ？ 生殖行為のエキスパートとしてこっちに来たんだから」

「はいっ、隊長は凄いですよ」

「……それ、あんまり褒めてないような？」

緊張のあまり、部屋にはいない彼女たちの声が……、聞こえるわけではない。

紅深を抱きながら身を起こした綺月には、悪びれもせず突っ立っている三人の姿が見えた。

「っ！ あーっあぁうあっ」

綺月はもはや、何をどう言えはいいのかもわからぬ錯乱状況のようだ。

それもそうだろうと桐子は納得しながら、遅れてこちらを向いた紅深にウィンクした。

「今夜この家は貸し切りだから、好きに使って。じゃあね」

続いて手を振りながら出て行く彼女たちに、紅深はきょとんとしてしまった。

（三人はいつからいたのでしょうか。恋愛の、せい……？）

目の前でパニック継続中の綺月を見ながら、彼女は瞳を潤ませ、婀娜な表情を作っていく。

（喜んでもらえるでしょうか。……こんな気持ちには、初めてです）

紅深は磨き上げた技術の全てを投じる。ブラウスのボタンを外す指には、至妙なる艶が光った。

あとがき

ハッピーバレンタイン！ Fukaponです。

小説を書くの久しぶりだなあって思ってた数えたら、二月ぶりでした。これで久しぶりって思えることの是非は微妙なところですね。

さて、ついに最終巻となりました。いかがでしたか。

読んでいる人が少ない上に、「おもしろかった」って言うてくれる人はさらに少なそうでもう頭痛が痛いんです。書いている本人も『恋果て止めて』は無茶苦茶だったよねーとか思っちゃってます、ごめんなさい。神々の争いごと、綺月たちの日常がうまく混ざってないのが癌だとはわかっていますが、それが難しいってことを学びました……。

最終巻にしてほとんどの伏線が回収できているはずなんですけど、大きな回収し損ねがあります。二巻の最後で紅深がキスしている女子生徒。彼女も紅深たちの同類なので、戦闘シーンで活躍させるつもりが……。あ、咲子先生の疑問も……。

言うまでもないとは思いますが、綺月は私の好みです。綺月みたいな子が好きなのか、綺月みたいになりたいのか。後者なんだろうとは思いますが、本気でそうは思っていないと言うか、憧れであり、無理であることはわかっています。だから気楽に書けるのかなと、書き終わった今、考えてみたりもします。

ラストシーンの紅深も、実は私の好みであいました。ロリコンとして許すまじき女の子（ロリコンってそんなに偉いのか？とゆー話はさておき）なんですけど、私はリードしてくれる年下（要素のある）女の子って好きです。ランドセル背負って何も知らない、ただ好きって子もそりゃ素晴らしいのですが。制服を脱ぐ日も近い子なら、いろいろ知っているってのが現実。踏まえて「でも私も不慣れだから、一緒にがんばろう」みたいなのも、いいよね。……とか言う人は少数派らしいので、まあ、商業では滅多に見かけなくてしょんぼりです。

なら、私が書けばいいんじゃないか。とゆー話はまあ、年末にでもできれば……。

さて、今回はこの辺でお別れです。

次のイベントはコミケツとスペシャル5、新刊は五月のコミティアかな。その先の姫カットに死力を尽くしたいとか言うて周りに「二回死ね」って返されちゃうので、コミティアの合同コピー誌にもちゃんと書きます……。

残り半日を切っただけかと思いますが、今日一日が、みなさまにとって素敵なバレンタインデーとなりますように。

二〇一〇年二月、まだチョココレートのない作業室にて。

恋果て止めて（4）

Fukapon

2010年 2 月 14 日 初版発行

発行所	まにふいくみやほか
印刷／製本	project KAIGO

Copyright © 2010 Fukapon <fukapon@projectkaigo.org>
<http://www.projectkaigo.org/>

